



## 年頭にあたり

医学研究科長 西 信 三



新年明けましておめでとうございます。平成17年の年頭にあたり、昨年1年間を振り返るとともに本年について若干の希望を述べます。

昨年を表現する一文字として京都のあるお寺の貫主が「災」を選択したとの報道がありましたが、全く同感であります。数

多くの台風の襲来とそれに伴う豪雨や地滑り、中越地震、スマトラ島沖地震などの天災に翻弄された一年でした。札幌も台風18号の直撃を受け、北大もその象徴的存在であるボプラ並木や楡の大木をはじめ多数の樹木などに甚大な被害を受けました。その損害は金銭的には2億円と試算されております。

北大は昨年4月1日に法人化され、国立大学法人北海道大学となっております。多数の規程、規定等が制定されておりますが、その制度の整備にはなお、多くの作業と時間が必要と思われます。色々と戸惑う事もありますが、この改革を大学の使命である教育・研究の向上に結びつけるため、全大学人の協調と努力が求められています。この法人化で私が最も大きな変化を感じているのは順守すべき法令の変化と会計制度であります。消防法を厳守しなければならなく新たな労働安全衛生法や労働基準法などの適用を受けます。

法人化の初年度の平成16年度は前年度とほぼ同額の資金が文部科学省より配分されました。これらは運営交付金として4月に交付額が決定し、交付されました。これはいわゆる「渡切り予算」でして、前年度までの様に途中で文部科学省に予算要求をして追加配当を受けるというシステムは原則としてなくなりました。

運営交付金は教育経費と研究経費に分けられるという制度も始まりました。運営交付金は別の分類では人件費と物件費に分けられます。しかし、これらの分類は絶対なものではなく相互に移行可能の様です。運営交付金は次年度より少しづつ毎年削減されるとされています。科学

研究費や奨学寄附金などの外部資金を獲得し、それを補う事が強く求められています。入学金や授業料の値上げも大学の収入を増す一方法ではあります。年10%以下であれば各大学の判断でこれらを値上げして良いとされています。私立大学と公立大学では学生・父兄の負担に差があります。特に医学部は最もそれが顕著であります。しかし、医学部で学びたいという学生・父兄に経済的なより高いハードルを設けることに賛成との議論は幸いに極めて少ない様です。

法人化により自由度が増した例もあります。前年度までは各分野に配当された旅費は旅費としてのみしか使用が認められず、他目的には使用することが出来ませんでした。法人化後は予算項目としての旅費は無くなり物件費に含まれて配分され、旅費として使用する額は自由に決定可能です。

法人化前には大きな話題となっていた教員の任期制の導入については、今年度はほとんど取り上げられませんでした。しかし、明年度以降には重要な緊急な課題となるでしょう。

「国立大学等施設緊急整備5カ年計画」による東南研究棟の大型改修は進行中であります。本年3月には竣工し、4月から使用を開始します。引き続き東北研究棟の改修を要求していましたが、誠に残念ながら、平成17年度政府予算案では認められませんでした。今後の改修計画の継続の実現を目指し、大いに努力しなければなりません。

現在、東北研究棟内にある学生サークル室及び学生食堂は同棟外に移転・拡充整備すると共に同棟内の研究室のスペースを確保するための事業を計画して、募金を行っております。前者は旧アイソトープセンター、後者は旧MRI棟に移転の予定で、本年4月には設計を開始します。募金は、目標である6000万円には大幅に達しておりません。各位の一層の御理解とご支援をお願い致します。

医学部保健学科は昨年4月に新任教授8名と第1期生

180名を迎えました。本年4月には新任教授7名と新任助教授1名ならびに第2期生をを迎えます。明年は第3期生と4名の新任助手、明後年は第4期生と4名の新任助手を迎える予定です。この学年進行が終了したときには、教授総数は35名、学生総数は編入学生40名を加え760名となります。

北大の各研究科は平成18年度には、研究院と学院に移行することになっています。本研究科も、平成18年度の概算要求に間に合せようと、その準備を開始するところであります。既に、水産学研究科、地球環境科学研究科は研究院と学院に分離しています。

修士課程は表に示す様に順調に発展しております。また、博士課程もここ数年100名に近い入学者を確保しています。

本研究科では本年3月に定年退職する予定の長嶋和郎、安田慶秀、杉原平樹、西信三の4名の教授と11月に急逝されたリハビリテーション医学分野眞野行生教授の後任を選考中です。3年連続で5名の新任教授を迎えることとなり、教授陣の顔ぶれは大幅に若返ります。大きな制度の変革の時期であり、発想や決意を新たにし、医学研究科・医学部の運営のリーダーシップにあたることを期待しています。

### 修士課程入学者の推移とその進路

	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
志願者	22名	43名	53名	53名
入学者	20名	32名	36名	40名(予定)
修了者	18名	30名		
博士進学者	7名	11名(予定)		

### 年頭のご挨拶

教務主任 櫻井恒太郎



2004年は内外に大きな天災や戦乱が相次ぎ、心休まる暇のない年でした。2005年の年頭にあたり、すこしでも平和が回復してくれることを祈らずにはおられません。

医学研究科においてもまた大学病院においても、独立行政法人化、保健学科の発足など新しい機構改革が進んだわけですが、概念や言葉が先行し、意思決定の選択肢やプロセスの実態が何であるか判断に迷うことが多かったという印象があります。

学生教育の面でも、新カリキュラムへの移行が2年目まで進行し、全国的規模でCBTやOSCEという知識と技能についての試験が在学中に必須になること、卒業後の2年間の研修が必修化されマッチングのために学生と病院が相互に評価をすること、など多くの標準的評価を受けなくてはならなくなりました。

11月の末にカナダのオタワを訪問する機会がありまし

た。ワシントン経由の乗り継ぎ便となつたため、往復ともダレス空港で悪名高い米国のセキュリティチェックを2度も通るはめになりました。昔はゲートまで家族が出迎えに来て交歓が見られた国内線ロビーも様変わりし、正装した紳士淑女が靴や上着を脱がされて警棒に追い立てられるようにロビーに一列に並ぶ様子は尋常の神経では見るに耐えません。会議に同席したカナダの某教授が「○○はparanoiaだ」と言ったのを聞いてむしろほっとしました。

オタワ大学では医学教育担当の副学部長に会い、日ごろ気になっていた教育面の管理について聞くことができました。OSCEはカナダの中でもオタワ大学が発祥の地だそうで小グループのtutorialも十数年前から始めていること、教員の教育評価は学生ばかりでなく同僚や副学部長の評価があること、各学年に2人ずつ専属の教育事務担当者がいること、臨床や研究と並んで教育の能力が教官の雇用、昇進の大きな柱であること、など、教育に力を入れている様子がよくわかりました。

医学部や大学の進む方向についても何を重点におくか

は重要なところですが、少なくとも北大の将来を担う学生の教育を疎かにしてはならない、と意識を新たにして

今年も努力していきたいと考えています。

## 教授就任のご挨拶

病態解析学講座 分子病理学分野 教授 笠原正典



平成16年10月1日付けをもちまして、吉木 敬名誉教授の後任として分子病理学分野（旧病理学第一講座）教授を拝命いたしました。平成16年は国立大学法人化の元年であり、それに伴い北大も大きな転換期を迎えています。このような時期に、伝統ある分野を担当させていただくことになり、責任の重さを痛感している次第です。

私は昭和55年に北大を卒業後、病理学第一講座の大学院生として、相沢 幹教授のご指導をうけました。当時、先生の研究室では、主要組織適合遺伝子複合体（MHC）の血清学的、免疫化学的研究が主要なテーマになっており、私はヒトのMHCでありますHLAのモノクロナル抗体を用いた解析に参加させていただきました。大学院修了後は、MHCの免疫遺伝学の泰斗であったJan Klein教授（ドイツ連邦共和国 マックスプランク生物学研究所）のもとに留学し、当時盛んになりつつあった遺伝子クローニングをもちいたMHCの分子生物学的研究に従事しました。その後は、米国マイアミ大学医学部において小さいながらも自分の研究室を持ち、この研究を継続する機会を与えられ、米国の研究、教育システムをじかに体験することができました。帰国後は、生化学第二講座の石橋輝雄教授（現名誉教授）のご指導のもと、MHCクラスI結合ペプチドの産生に関与するプロテアソームとよばれるタンパク質分解酵素を中心に研究を進めました。平成10年には、縁あって、総合研究大学院大学

（大学共同利用機関を母体とした大学院大学で、本部は神奈川県葉山町）に赴任し、主にMHCやナチュラルキラー受容体のゲノム研究をおこなってまいりました。

今回、分子病理学分野を担当させていただくにあたって、私は三つの抱負をもっております。まず、研究面では、これまでの基礎的な研究を継続するとともに、それを土台として、疾患の分子基盤の解明につながる新しいプロジェクトを立ち上げたいと思っています。言うは易く、行なうは難し、とは思いますが、医学の進歩にいさかなりとも貢献できる独創性の高い研究をしていきたいと念じています。次に、病理学には、病理診断学という大変重要な領域があります。人体病理学の分野に経験の浅い私がこのようなことを申し上げるのは、僭越かもしれません、医学研究科、医学部として確固たる人体病理学トレーニングシステムを整備することの重要性は論を俟ちません。関連分野の先生方と力を合わせて、トレーニングシステムの充実を図っていきたいと思っておりますので、ご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。そして第三には、これまでの第一病理と同様、臨床、基礎各分野と活発な人事交流、共同研究をおこなっていきたいと思っております。病理学は大変間口の広い学問でありますので、いろいろな面で協力し合えることが多いのではないかと期待しています。よろしくお願ひ申し上げます。

もとより微力ではありますが、高い目標と理想を掲げ、「急ぐことなく、しかし休むことなく」、毎日前進していくたいと考えております。医学研究科、医学部の皆様には、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 眞野行生先生を偲ぶ

機能再生医学講座 リハビリテーション医学分野 助教授 生駒一憲

それは突然のことであった。平成16年11月7日午前9時56分、眞野行生先生は享年62歳で逝去された。リハビリテーション医学分野の教授としてご活躍の最中、道半ばでのあまりにも早すぎる旅立ちであった。

眞野行生先生は昭和43年名古屋大学医学部をご卒業後、

昭和47年より4年間にわたって渡米され、ニューヨーク大学、ペイラー医科大学、メリーランド大学でリハビリテーション医学、神経内科学の臨床および研究に関して研鑽を積めた。帰国後、国立武藏療養所神経センター（現国立精神・神経センター）を経て、昭和56年に奈良

県立医科大学神経内科学講座助教授に就任され、同附属病院中央リハビリテーション部副部長を併任された。平成7年10月、北海道大学医学部リハビリテーション医学講座の教授に就任され、平成8年1月、附属病院リハビリテーション部部長を併任され、平成12年4月、現職であった北海道大学大学院医学研究科高次診断治療学専攻機能再生医学講座リハビリテーション医学分野教授に就任された。眞野先生はリハビリテーション医学の中でも、特に機能回復に重要な役割を果たす「脳の可塑性」に注目され、その研究手段の一つとして日本で初めて経頭蓋磁気刺激装置を開発された。この装置を用いて中枢神経の評価および脳の可塑性についての研究を教室員とともに推進され、この分野での第一人者であった。また、眞野先生は好奇心・探究心に富み、常に新しい分野の研究に挑戦され、我々教室員を先導していただいた。

附属病院のリハビリテーション科はゼロからのスタートであったが、平成16年10月にはリハビリテーション科外来を拡充するなど、リハビリテーション科の充実、発展に精力的に取り組まれた。外来患者はひと月に3000名を超え、眞野先生のリーダーシップに対する期待がますます高まっていた矢先であった。

学会活動は幅広く、日本リハビリテーション医学会理事、日本電気生理運動学会会長など多くの学会の役職を務められた。平成12年に国際電気生理運動学会、平成14年にリハビリテーション合同大会、平成15年6月に日本リハビリテーション医学会学術集会、平成16年6月に日本神経治療学会総会を各々学会長として開催された。北海道医師会常任理事としても活躍され、経頭蓋磁気刺激法の研究に関する北海道医師会賞、北海道知事賞などを受賞された。

眞野先生はリハビリテーション医学教室の初代教授として、リハビリテーション医学の教育・啓蒙には人一倍熱心であり、教室員一人一人に丁寧に指導されていた。また、眞野先生はご家族を非常に大切にされていたことも有名である。我々の悲しみとともに、眞野先生、ご家族ともいかに無念であられるかと、胸が痛む思いである。眞野先生がおられなくなり、その存在がいかに大きかったかを実感する毎日であるが、眞野先生が作られたリハビリテーション医学教室をさらに発展させることができ、お世話になった我々教室員のせめてもの恩返しである。

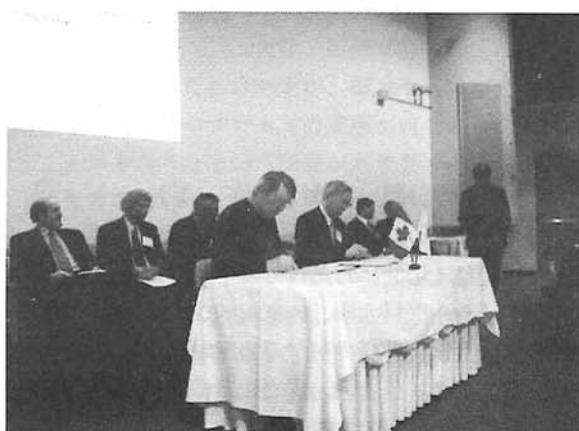
ここに謹んで眞野行生先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## オタワ大学医学部と北海道大学大学院医学研究科との学術交流協定 —21世紀における女性の健康問題の研究促進を目指して—

生殖・発達医学講座 婦人科学分野 教授 櫻木範明

2004年11月30日に、カナダの首都オタワ市の日本大使館において、オタワ大学医学部と北海道大学大学院医学研究科との学術交流協定（Agreement for Academic Exchanges）の調印式が行われました。本研究科からは櫻井恒太郎副研究科長が研究科長代理として西信三研究科長が署名した協定書を携えて出席し、Walkerオタワ大学医学部長との間で調印が行われ、協定が締結され

ました。本協定の目的は、「学術交流による相互協力を通じて両大学医学部の〔ヒト生殖内分泌〕研究の発展・推進を図る」ことであり、「女性医学」の進歩に貢献することにあります。今回の調印式では北海道大学大学院医学研究科とオタワ大学医学部間とともに、オタワ大学医学部一東北大学医学部、トロント大学医学部一東北大医学部の学術交流協定も締結されました。



オタワ大学は1865年に創立された大学で、10の学部を擁し、学生数はおよそ25,000人を数えます。医学部には17講座があり、teaching hospitalが6カ所にあります。今回の学術交流協定締結はオタワ大学産婦人科Benjamin Tsang教授から本研究科婦人科への強い働きかけによるものでした。オタワ大学医学部は日本の研究機関との積極的な学術交流を進めてきています。過去の経緯を見ると、まずオタワ大学医学部産科婦人科と福井医科大学（現福井大学医学部）産科婦人科の共同研究をもとに両校間の学術交流協定構想が持ち上がり、2000年3月にオタワ市においてオタワ大学医学部と福井医科大学ならびに神戸大学医学部間の学術交流協定が締結されました。同時に福井医科大学、群馬大学、神戸大学、東京大学、オタワ大学からの研究者が参加してCanada-Japan

Bilateral Exchange in Reproductive Biology and Human Reproductionと銘打ったワークショップが開催されています。今回の調印式は第3回本ワークショップに合わせて行われ、調印式に櫻井恒太郎副研究科長が、ワークショップに本研究科婦人科から櫻木範明、小林範子の2名が参加致しました。出席者の研究領域は産婦人科をはじめ、生化学、生理学、獣医学、分子細胞生物学など多岐にわたっていましたが、今後はさらに小児医学、環境医学の面での共同研究もすすめる構想が示されました。

今回締結された学術交流協定を通して女性の生殖内分泌・周産期・生殖臓器腫瘍などに関する医学研究が発展し、それによって女性の疾患の予防・診断・治療の向上がもたらされることを期待したいと思います。

## 平成16年度医局対抗野球大会

癌診断治療学講座 腫瘍外科学分野 高橋 康宏

今年は北海道の野球界にとって激動の一年になりました。日本ハムファイターズが札幌に本拠地を移転し、さらに大リーグから新庄選手が日本ハムに移籍したことにより、北海道の野球熱がじわじわと上昇していくのを実感しました。また、深紅の大優勝旗が北海道に上陸するという大事件が起こりました。これらは、野球ファンだけでなく今まで野球にあまり興味の無かった人たちにも大きな感動をもたらしました。このような中で、医局対抗野球大会がいつも通り行われました。今年も6月～9月の間、全部で15医局のチームが白熱した戦いを繰り広



げました。今年は新カリキュラムで新人医局員がいないという中、第1内科幹事の横田先生のはからいで、なんとか新人医局員も参加できるという形になりました。わが第2外科野球部は、昨年まで指揮を執っていた（野球狂の）加藤教授が昨年御退官され、今年は新近藤教授体制で、そんなに頑張らなくてもいいのではとの雰囲気があったのですが、近藤教授は全試合観戦し、「今年はなんとしても野球優勝」との恐ろしいお言葉をいただき、わが野球部のメンバーを震撼させました。そんな中、わが野球部は老体に鞭を打って、何とか決勝まで辿り着くことができました。決勝は昨年と同様、整形外科となりました。整形との一戦は逆転につぐ逆転のシーソーゲームになり、最後まで予断の許さない展開になりましたが、なんとか優勝することができました。今年の幹事医局でありました第1内科の横田先生には日程やグランドの調整等に御足労いただきましてありがとうございました。来年は第2外科が担当医局となっております。来年度も多く多くの医局に参加いただけることを願っています。

決勝の模様は第2外科医局のホームページに動画配信されています。お暇な人は御覧下さい。

<http://www.med.hokudai.ac.jp/~surg-2w/index.html>

## 平成16年度医局対抗サッカー大会

癌診断治療学講座 腫瘍外科学分野 米森 敦也

今年も農試公園屋内競技場にて医局対抗サッカー大会が行われました。昨年、我が第二外科は、決勝戦で第一外科に延長Vゴールで惜しくも敗れ準優勝で終わっていましたため、今年こそは優勝を目指していました。

予選リーグはA～D組に分かれ、総勢17チームが参加しました。(A組：第一外科、癌遺伝子(基礎合同)、第二内科、第一内科、B組：第二外科、眼科、大学院合同、循環器内科、生体医工学、C組：精神科、形成外科、皮膚科、泌尿器科、D組：整形外科、リハビリ科、第三内科、麻酔科)

B組予選リーグは11月6日に行われました。初戦の眼科戦は、前半は苦戦し1-0、後半6-0とし7-0で快勝。生体医工学戦では、前半13-0と大量リードを奪い(第二外科前教授の加藤紘之先生が2ゴール、医局秘書の壱岐さんが1ゴール決めました)、後半3-0で16-0と圧勝。大学院合同戦では、前半6-0、後半1-0で7-0と快勝。循環器内科戦は、前半2-1、後半1-0と接戦を制し、3-1で勝利しました。総得点33、失点1の好成績で予選1位通過となりました。

予選各組上位2チームの計8チーム(A組1位第一内科、2位第二内科、B組1位第二外科、2位循環器内科、C組1位精神科、2位形成外科、D組1位整形外科、2位麻酔科)で、11月27日に決勝トーナメントが行われました。初戦の麻酔科戦は、前半5-0、後半6-1の11-1で快勝。準決勝は精神科との対戦でしたが、前半2-0でリードし、後半4-0と突き放し、6-0で勝利しました。決勝戦は整形外科との対戦となりました。前半は先制点を許すも逆転し2-1でリード、後半に入り同点とされ、さらに追加点を許し2-3と逆転されてしまいましたが、再度同点に追いつき、終了間際に執念の決勝点をもぎ取り4-3と逆転勝利しました。まさに死力を尽くした戦いを制し、念願の優勝を果たすことができました。

かくして、今年はかねてからの第二外科の目標であった、野球優勝、駅伝上位入賞(今年は一般参加で7位)、サッカー優勝を見事に達成し、最高の1年を締めくくることができました。来年も第二外科はスポーツイベントに全力を注ぎます。

## お知らせ

### ◆ 消防訓練 ◆

医学研究科では、10月12日(火)午後2時25分中研究棟2階実験室から出火したとの想定で、教職員・学生等約200名が参加して、消防訓練を実施しました。今回の訓練では、本研究科と遺伝子病制御研究所との合同で自

衛消防班を中心とした通報、避難誘導、初期消火の訓練が適切かつ迅速に行われました。また、訓練終了後は、実際に消火器を使用した消火訓練を行い、訓練の重要性と防火に対する意識を高めることができました。

### ◆ 医学研究科・歯学研究科合同慰靈式 ◆

医学研究科及び歯学研究科では、9月28日(火)午後1時30分からクラーク会館講堂において、この1年間医学・歯学の教育・研究・診療のため尊い御遺体を捧げられた172名の御靈の御冥福をお祈りする慰靈式を執り行いました。

慰靈式には、御遺族、来賓、総長、関係部局長、教職員、学生等349名が参列しました。

式は解剖体御芳名奉読の後、参列者全員による黙祷を行い、続いて西医学研究科長及び戸塚歯学研究科長から御靈の御遺志に報いるためにも一層の教育・研究・診療の発展に努めたい旨の追悼の辞が述べられた後、参列者による献花を行い、最後に西医学研究科長から謝辞があり、慰靈式は厳粛のうちに終了いたしました。

## ◆ 教務関係の主な行事予定 ◆

### ◇大学院

#### 大学院入試関係

- 博士課程入学試験：  
(合わせて学位申請に係る語学試験を実施)  
2月2日(水) 13:00～15:00 外国語試験、  
15:20～専門科目試験  
2月3日(木) 9:00～留学生に対する日本語試験  
2月25日(金) 10:00 合格者発表
- 研究生入学願書受付期間（平成17年4月入学）：  
2月7日(月)～14日(月)

#### 博士課程修了関係

- 1月17日(月)～21日(金) 公開発表  
2月10日(木) 学位論文最終審査（研究科教授会）  
3月25日(金) 博士学位記授与式  
【11:30～クラーク会館】

#### 修士課程修了関係

- 1月24日(月)～26日(水) 公開発表  
2月24日(木) 修士論文最終審査（研究科教授会）  
3月25日(金) 修士学位記授与式  
【10:00～本学体育館】

### ◇学部

#### 入試関係

- 1月15日(土)・16日(日)：大学入試センター試験  
2月18日(金)：私費外国人留学生入学試験（面接）  
2月25日(金)：第2次試験 前期日程  
2月26日(土)：帰国子女特別選抜試験（面接）  
3月12日(土)：第2次試験 後期日程

#### 授業関係

#### ・平成16年度授業最終日・定期試験日程

学年	授業最終日	定期試験
1年次	2月1日(火)	2月2日(水)～15日(火)
2年次	2月3日(木)	2月4日(金)～10日(木)
3年次	2月10日(木)	2月14日(月)～18日(金)
4年次	3月3日(木)	4月18日(月)～28日(木) 【新年度5年次】  通常授業は、3月2日(水)まで。3月3日(木)は、12月2日(木)午後休講分の補講のみ
5年次	3月11日(金)	

6年次卒業者の発表：2月10日(木) 教授会終了後  
公用掲示板

#### ・平成17年度授業開始日

- 1年次：4月12日(火)  
2年次以上：4月4日(月)

#### 退職記念最終講義

- 3月3日(木) 13:15～【臨床大講堂】  
講演者 杉原平樹教授、安田慶秀教授、  
西信三教授、長嶋和郎教授

#### 学士学位記授与式及び医学部学位記伝達式

- (卒業者の発表：2月10日)  
3月25日(金)  
10:00～学位記授与式【本学体育館】  
13:00～医学部学位記伝達式【臨床大講堂】  
終了後、卒業祝賀会【第1会議室】

#### 医師国家試験日程

- 2月19日(土)・20日(日)・21日(月) 試験日  
合格者発表は、3月30日(水) 14:00 北海道厚生局

## ◆ 卒業見込み者の進路動向 ◆

(H16.11.12現在)

卒業見込み者93人（平成17年3月卒見）

◇卒後研修医 91人 (97.8%)

研修先内訳 道内 66人 (72.5% : 66/91)

　　北海道大学病院 47人

　　その他 19人

道外 25人 (27.5% : 25/91)

◇その他

2人 (2.2%)

## ◆ 平成17年度科研費申請状況 ◆

科学研究費補助金の申請件数年度別一覧 医学研究科・医学部

研究種目	審査区分	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	備考
特別推進研究		1	1	1	0	0	
特定領域研究			43	33	28	42	特定(A・C)を統合
特定領域研究(A)		22					13年度で廃止
特定領域研究(C)		38					13年度で廃止
基盤研究(S)		14	2	3	3	4	13年度発足
基盤研究(A)	一般	9	13	9	9	5	
	展開	6					13年度で廃止
	海外学術調査	0	0	0	0	0	
基盤研究(B)	一般	36	49	39	38	51	
	展開	38					13年度で廃止
	海外学術調査	2	4	1	2	2	
基盤研究(C)	一般	40	38	33	41	54	
	企画調査	1	3	1	2	1	
萌芽研究			58	63	62	67	14年度から新たな種目
萌芽的研究		50					13年度で廃止
若手研究(A)			0	0	3	2	14年度から新たな種目
若手研究(B)			11	6	20	27	14年度から新たな種目
奨励研究(A)		13					13年度で廃止
合計		270	222	189	208	255	

※ 申請件数は新規の数字である。

※ 15年度以前は研究科(診療所含む)の件数、16年度以降は医学部(保健学科、診療所)も含む件数。

### 編集後記

広報第24号をお届けします。平成17年初めの広報ということで、年頭にあたってのご挨拶を研究科長と教務主任からいただきました。生のお言葉は教授会その他の会議などでお聞きしていますが、文章として整理して語って頂くことは意味のあることで、年頭に当たって私たちも身が引き締まる思いがします。昨年も新任教授が多く就任され、研究科長のお言葉通り、研究科は「若返り」の時期になっておりますが、昨年10月に就任なされた笠原正典教授からのご挨拶をいただきました。新任教授のご抱負を文章として記載されるのはこの広報だけですので、やはり意味のあることです。昨年は色々な問題もあり辛いこともありましたが、中でも11月に眞野先生が逝去されたことは非常に悲しいことでした。眞野先生への追悼文を生駒先生にお願いしました。改めてご冥福をお祈り申し上げます。なお、オタワ大学医学部との学術交流協定が調印されましたので、その概要を櫻木先生にお願いしました。本年も様々な改革や問題が進行しますので、広報もそれなりの役割をして行きたいと思っております。今後もぜひご一読下さい。(澤口俊之)

### — Home Page のご案内 —

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

[ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp](mailto:ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp)

となっています。どうぞご利用ください。

### 北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会  
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目  
連絡先 医学部庶務係 電話 011-706-5003  
編集委員 澤口俊之、安田和則、小橋元  
佐藤松治